

史的にも紆余曲折を経て、今日に至っているのである。

④ 観光におけるユニバーサルデザインの現状と課題

ユニバーサルデザイン（以下UD）について、皆に分かりやすく、その背景から説き起こし説明したので、聴講者もUDというものをよく理解出来たと思う。高齢者の旅行実態と志向について、福岡市東区のお年寄りに対し、自分たちでアンケートを実施し、その努力を惜しまぬ調査には好感がもてる。そして、先進的な熊本県におけるUDの取り組みに絞ったのも良かったと思う。最優秀賞にふさわしいプレゼンテーションであった。

⑤ ありのままで～島根にみる地域観光の在り方

観光の経済波及効果の大きさなど、観光がなぜ注目されているかという背景から入り、地域観光の在り方について、比較的に関交通の便が悪い島根を取り上げたが、よく調査、研究している様子が伺えた。現存する観光資源を活かし、地域住民、メディア、交通など五つの要素をまとめて、その魅力を発信していくという主旨には賛成であるし、説明の論旨も明快であった。欲を言えば、この五つの要素を具体的にどのようにまとめて、情報を何処のマーケットに対し発信していくか迄の提案があれば、更に良かったと思う。

⑥ 日本が関係する領土問題の解決方法について

竹島や尖閣諸島の領有問題という大きなテーマに挑戦した意欲は買える。しかし、国家戦略にかかわる外交問題を、20分という限られた時間内で研究内容を発表するには、余りにも大きすぎるテーマではなかったかと思う。例えば、竹島の問題でも、韓国が国際司法裁判所のテーブルに着かないから、「お互いに領土の所有権を放棄する」という方法で解決するという提案は、前例が一つあるとはいえ、万一、日本側が同意しても、韓国側が同意しなければ全く意味の無いことであり、簡単に結論づけるような問題ではないと考える。

第4分科会

第4回商学部グループ研究発表会 審査講評

毎日新聞社顧問（元西部本社編集局長）篠原 治二

はじめに

初めての経験であったが、おもしろかった。知的刺激をうけた。正直に告白すると、図書館から国際会計基準や、ブランド価値論の本を何冊か借り一夜漬けの勉強をして臨んだ。

ところが当日、「審査はどうぞ独断と感性でお願いします」といわれた。なんと温かい言葉であろう。これは先生方のホスピタリティーを、十分に表わしていた。

学生諸君の真摯な態度には、感銘をうけた。この企画は、開かれた大学にふさわしい、

としみじみ思った。とくにOA入試を経て、まもなくキャンパスの一員となる高校生をフロア討議に参加させたのはよかった。各ゼミの発表者は、大学はどのようなものであるか、身をもって後輩たちに示したわけである。このような実のある発信を、広く社会へ向けてもやってもらったら、KSUの将来は明るいと確信した。以下、個別にコメントしよう。

①「地域活性化と観光地づくり～未来への道標～」

北海道の旭山動物園と、昭和の町を再現した大分県豊後高田市は、ともに逆境から立ち直り、活況を呈している。とてもわかりやすいテーマであった。パワーポイントには、かわいい動物や、昭和ロマンの町並みがうまく編集され、視覚的に成功した。両者は、活性化プランづくりを業者に丸投げするような愚を避け、手作りのインフォメーション（手書き説明板、一店一宝、ボランティアガイド）を展開する。これら共通点をうまく解析していた。私は「あえてアナログで勝負した成功例である」といった決め言葉を用いたら、より印象を強くしただろうと思った。じっさいに豊後高田町を訪ねた感じを問うと、発表者は「懐古趣味だけでいつまでもつだらうか」と微かな疑問を語った。そのとおり、持続して繁栄するためには、たえず変化することが必要である。私は、この研究が示した今後の課題に納得した。

②「ハウステンボスの挑戦～テーマパークから街へ～」

いったん破綻したが、ハウステンボスの創業者、神近義邦氏には単なるテーマパークではなく、将来一つの街として経営しようという野望があった。もう一度、その原点に立ち返ってみようという、大胆な研究テーマの設定に、私は感心した。やがて入場料がタダになるというドンキホーテのごとき発想は、既成の経済人ではできまい。200億円の債権放棄をした銀行はさぞ悔しがらるだろう。しかし、佐世保市はすでに、「ハウステンボス町」としている。過大な初期投資のくびきを脱した今、あながち、夢とも思えない。仮説を立てたら、具体的に実現への仕組みを説明してほしかった。定住人口をどうやって増やすか。あのインフラを維持するには年間50億円かかる、どこからそのカネをもってくるのか。街の形成に大学の立地は望ましいという。それは、ここに長崎国際大学ができ現実のものになった。さて、その効果はどうか。この観点だけでもおもしろい研究になると思う。

③「ブランド価値—価格の差からみるブランド価値—」

ブランドを経営の資産として、目に見える数字で表わそうというCB価値（コーポレートブランド）は、測定モデルが開発されて話題になっている。ならば消費者の側からもブランド価値を数値化できないか、とチームは考えた。ニセモノが出回る率とか、ブランド品の原価と定価の関係など、いろいろ模索したという。その試行錯誤の過程が尊いと思う。

そして、ローレックスとセイコーの上級品について、定価と並行品の値段の差を調べることにとり着く。単純に見えるが、独創的である。ビックカメラや大黒屋に足を運んだ。結果、ローレックスの定価と並行価格には平均11.5%の開きがあり、セイコーのそれは一律20%引きであったという。そこからブランドの上下を推定するわけで、わかりやすい。輸入品と国産品を同じ方法で計算してよいのかという疑問は残る。だが、こういう実験的アプローチは、若者らしいので、さらに自分流の計量モデルを考案してほしい。

④「会計基準の国際化について」

経済のグローバル化に密接したタイムリーなテーマである。アメリカのエンロン事件を引き合いに出すまでもない。日本でもカネボウの粉飾決算が発生し、現に日興コーディアルが子会社から利益だけ付け替えていたことが大問題になったばかりだ。もはや、連結財務諸表の基本は常識となり、その他キャッシュフロー、税効果、労働債務の明確化など、どこから見ても経営の実態がわかるように改定は進んでいる。以上のような現状をまず予備知識として解説してほしかった。研究発表は、世界のどのような機関が会計基準の設定に関わり、国際化はどう推移してきたか、を専門的に述べた。残念ながら、難しい手続き論に終始したきらいがある。プレゼンテーションにとって、大事なことは平易な言葉で語ることだ。NHKの週刊こどもニュースは、ホリエモンや、村上ファンドのような姿形の見えにくい経済事件を、手にとるように説明してくれた。その表現力に学ぼうではないか。

⑤「中小企業の後継者問題について」

中小企業の後継者難は、深刻な問題である。後継者を決めきらない企業が半数以上のほり、うち製造業は32%におよぶという。対策として「経営者は子供以外の第三者に後継者を選ぶなど、後継者の範囲を広げていくべきだ」と提言した。これは大賛成である。ただし、そこにいたる考察が、総論的、概説調なので、迫力が感じられない。もう一つの結論として、「中小企業の社会的重要性を多くの若者（大学生など）に知ってもらうこと」としていた。ことはそう簡単ではない。この発表に不足していたのは、実証精神ではなからうか。キャンパスには中小企業の子弟が、いくらでもいるはずだ。学内で片っ端からインタビューをただけでも、相当なデータが集まっただろうにと思う。

むすび

内容は荒削りでもかまわない。磨きをかければ、よくなる可能性があるからだ。参考文献を渉獵することは、もちろん大切である。昨今、インターネットの力で、それは以前よ

り楽になった。失礼な言い方になるけど、「コピー」と「貼り付け」で、ある程度のごまかしはきく。そんなことよりも、現場に飛び込んで検証し、当事者に会ってナマの声を聞いてほしい。きっと収穫がある。ぜひ、足を使ったフィールドワークをお勧めしたい。

発表の際の注文が、一つだけある。もっと大きな声をだしてほしい。ボソボソ、モジモジは、いかにも自信なさげに見え損をする。歌舞伎役者の値打ちは、口跡の良し悪しできまるといふ。私はかつて、知人の大学教授にたのまれ新聞社を志望した学生にたいし、面接では大きな声をだしなさい、とワンポイントだけ助言した。かれは、そのことを実行し、合格を果たした。単純だなあと誤解されても困るが、そんなものだ。企業が学生に元気よさを求めるのは、新入社員のエネルギーを使って組織を日々、活性化したいからに他ならない。

最終的に説得力の決め手となるのは、パワーポイントのデジタル情報ではなく、人間の肉声である。

第5分科会

第4回商学部グループ研究発表会 審査講評

元ダイハツ工業株式会社 副社長 深森 芳昭

1. 第5分科会全体の講評

まず発表されたグループの方々に、「ご苦労様でした」と申し上げたい。ある一つのことを研究して、まとめて発表するということは大変努力の要することであり、発表までの数ヶ月間はかなりプレッシャーがかかったものと推察します。その努力と経験は必ずやこれからの色々な場面で、大きな自信と誇りとなっていくことでしょう。

さて「大学のグループ研究発表会」の審査委員の要請を受けて、若い方々のフレッシュな考えや意見に接することが出来るという大いなる期待を持って審査に臨みました。結論から言って、私の期待は半分達成、半分未達成に終わりました。達成の部分は、各グループとも真面目に、真剣に取り組んでいる姿に感心しました、また先生方がある面では、学生諸君よりも一生懸命この発表会を成功させようと努力されている点に感服いたしました。

未達成の部分は、各グループを通じて言えることですが、研究テーマに対する探究心が浅くて狭いことです。従って発表の「まとめ」、「結論」が短絡的に陥りがちな点です。篠原外部審査委員も最後の講評でおっしゃっておられたように、「自分の足でかせぐ」ことが欠けているのと、もっと学生としての純粋な疑問に基づいた研究、発表がすくなかった